

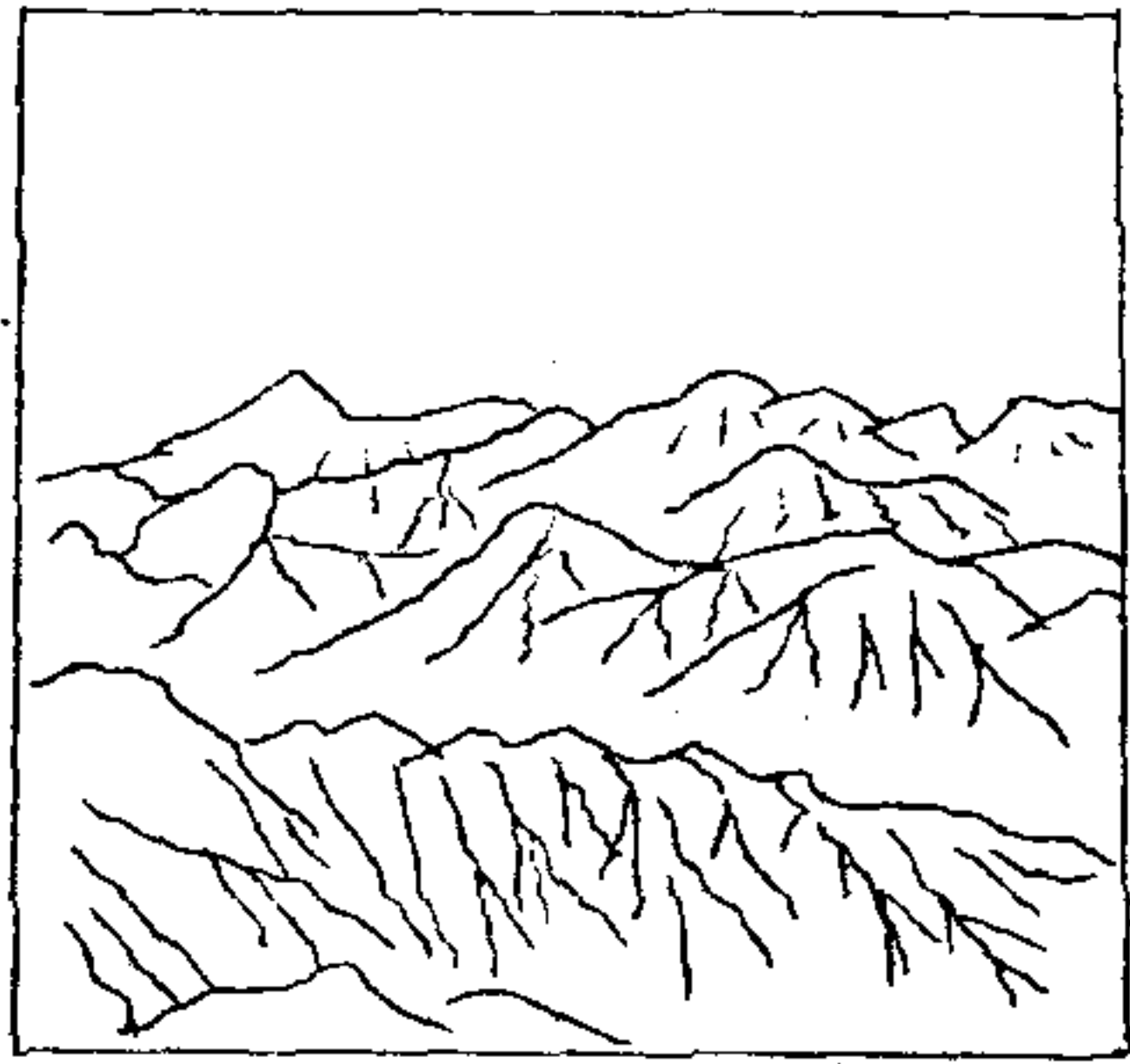
雲稜

創刊号



東京雲稜会

雲 稜



創刊號

1951

No 1

山行計畫

四月八日	丹沢塔ヶ岳集中	全	員
五月五、六日	兩神山	係	倉田
五月二十七日	ザイル祭	全	委員
六月中旬	地獄谷 権現沢	係	吉野
六月二十四日	ヒツガイ沢	係	紺野
七月上旬	石空川	係	大島
七月中旬	尾瀬沼	係	猿渡
七月二十二日	慰靈祭(於一、倉)	係	吉野
八月中旬	洞沢合宿	係	塚田

委員紹介

代表委員	吉野幸作
備品	塚田新一
渉外	川又孝之
編輯	大島 広
庶務會計	原田一 紺野たい子

卷頭言 塚田耕一

「雲稜」創刊號に際して

黎明が訪れた……

谷間より流るゝ

せゝらぎの音が靜かに聞えて来る

シンフォニーの序曲が奏せられたのだ!!

吾々が新しい希望に燃えて、会を創立して以来既に四ヶ月を経過し、その間新しい山行を幾つか体験しその成果を、さゝやかながらこの「雲稜」誌上に発表し得た事を先づ會員諸君と共に慶びたい。

山は四季を通じてその靜かな慈愛に満ちたはずまひを以て常に吾々に新しい希望を与えて呉れる。

(二)

吾々はこの希望を充分に汲みとつて、若き世代の青春をエンジョイし且つ、心身の健全なる発達を目すべきだ。山は云ふ迄もなく大自然の一分野であり、広大な自由の天地である。吾々が山嶺奥深く分け入り、清涼なる泉の畔りにたゞずみ、亦山嶺の広闊なる景観をこの眼で見、身体で呼吸し、心を昇化せしむるならば、それは意識するとしなうとは拘らず全くの自由人に成り切れたといえるであらう。

現今「自由」と云ふ言語はこの日常社会に数多く語られ活字となつて吾々の目に触れるが、自然の中に立つ人間が、始めて世俗の混濁と拘束と騷擾から逃れで、自由を謳歌出来るのではないだらうか？

吾々が山を愛する型式上は、於て自由の意義を原始人の野性と履き違へ往々にして野蠻なる行爲を爲す岳人を見受ける事があるだらうがこれらの岳人は、現代人の自由の何んたるかを知らずして山を愛して居るのであつて、人間としての理性も常識も持ち合はせない一匹の獣に等しき悲しむ可き存在でしかない。

亦一方 山を自分が支配してあるか如き考へ方を以

て山を愛してゐる人間がある。そう云ふ人の云ふ処を
聞くに、果して自分の足で歩いたかどうかは解らない
が、特定の山に就ては、克明に知つてゐて、

「あの山は、何処ぞこの谷を登らなければいけない
。君は私の云ふ処を確實に登りなさい。」

と云ふ様な、調子である。山を自己の足の爲の対照と
してきり考へて居ないのかと疑へば疑える。そこには
山を單なる自己の經歷に重みをつけんとする事のみを
対照として居るのでしかない。精神的にはほとんど山
から受けるものは寧ろ等しき状態である。自由を支配
と間違へ偉大な人間等その偉大さに比較したらその足
元にも及ばない山をも自由にしたと考へる人が居る。

以上山を愛する型式の上に於てと最初に断つたが、
これらの何れもが、真に山の偉大さに尊敬の念を抱き、
愛情を感じた人間である筈がない。

近來スポーツに於て「スポーツを樂しむ上」に於て
唯競技に勝つ争のみを目的としてはならぬ。又親
技をする前提として立派なスポーツマンシップを發揮
せねばならぬ。と云う事が叫ばれている。登山は云

うまでもなくスポーツであり、他のスポーツに比較
して、より一層このスポーツマンシップを發揮せね
ば立派な登山を行つたとは云ひ得ない。吾々はこの
スポーツマンシップを理解し行爲の上に表はしてこ
そ、眞のスポーツマンであり、自由人であると云えるのだ。
吾々が此処に「愛護会」を結成したのも、所詮記録のみ
の歴史を、会の上に積み重ねるに非ず、亦、野性を発
揮せんが爲でも更々ない。

会を構成する人々の自由なる意志によつて広い登山
分野の隅々まで歩き且つ、探究することによつて、新
しい登山理念を打樹て、会員各自のそれによつて受け
る「自由と爽氣と歡喜」を最上の目的とするにある。

斯くの如き理想が、会員の體驗によつて、このさ、
やかなレポート「愛護」の一頁一頁に滲み出て續いて発行
されて行くならば、都教の大小、頁の多少に拘はらな
立派な美しいレポートに發展して行くに違いない。

創刊に際して、その巻頭に、この希望を述べ、後は
今後の吾々の努力と體驗に依つて、「愛護」を育てて
上げて行く事を吾々は深く望む次第である。 終り

富士への道

川又孝之

肩の荷は次才に重みを増し、何時か歩調も乱れ落ちになる。

音も無く吹く風はそう／＼として冷たく手足を凍えさせる。振り向けは吉田の町、舟津の町の灯がきらきらと明滅し、何故か遠い所へ置き去りにされた旅な氣持になる。

今夜はばかに疲れる。歩いてはいるけれど五体は正に草木も睡る丑滿時と去った具合で所構わず横になる横になると同時に頭の芯から地軸に向つて蒸気の塵埃真逆さまに吸込まれる旅に、そしてあたりは静寂そのもの、姿となる……

寝ている私に感じるものはしん／＼と迫りくる山の息吹き、そして森は古き昔を物語り、聲は我が世の春とかけ廻つてゐる幸だらう。自然が話を解するなら私はこれと語りたい。どの位寝たであらう。誰ともなく

(四)

目を醒す。もう夜明も近いオリオンも大分傾いていた。寒さに追われて斥き出す。先頭の五合近しとの声に元氣が出る。何時の所にか樹林帯を抜ける頃。

山頂スカイラインに朝日が輝く。薄い程凍えて目が痛い……道々に私達のいる所へ光が届く。それから裾野の山々へ。そして部落へと。

意その一刻々々の変化は奥に鑿舌に盡す事のできな

いものである。

萬物ぬむる死の闇から活動の世界への切変えである。凡も目を醒したのであらう。ゴオーと唸つて山を駆け降り、山鳥がけた、ましく啼き出す。

見る／＼太陽は高度を増してくる。足下には風雪に幾年傷みつけられたであらう岳樺、蕩々と果なく続く針葉樹林。

この林な時にこそ私は身に永遠を感じ、悲しみも苦しきも綺麗に忘れ、人間と生れて来た喜び生きるというこの輪しさを感ずるのだ。

この感歎を忘れ去る事は出来ない。この無限の喜びがある故に私は山を降りる事が出来ないのだ。心から私はその頂に想う。ベルグハイム

岳の個性

劫初より一悠久へ
宇宙をつらぬく紺青の

大空の下

白銀と光る一連の山波、

その静まれる動意は

巖家の運命を啓示するごとく

限りなき九天へ

みづからの性にもとづく

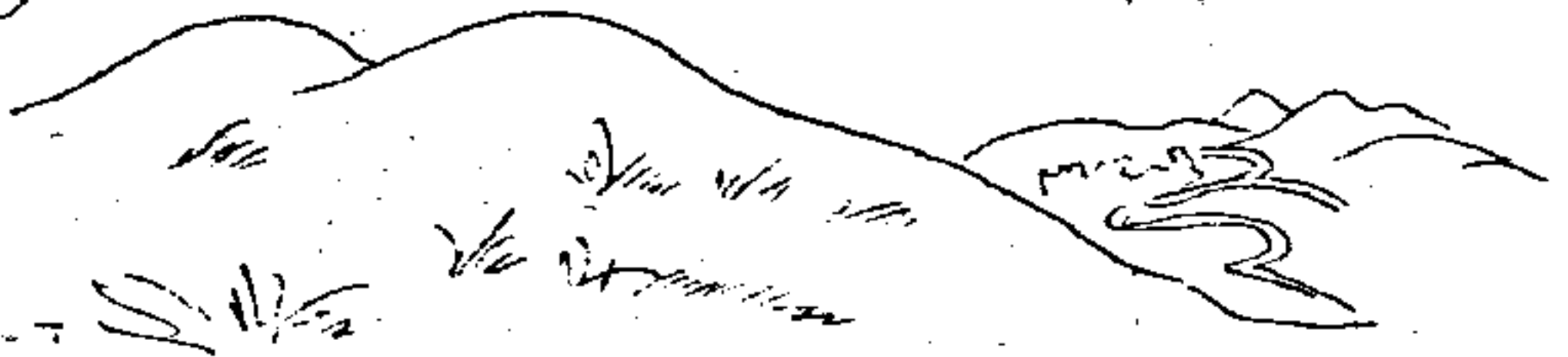
峯々を押し樹てつゝ、

しかも

登高者は

深き内省を強ふるのだ

(ある詩集より)



詩『ケルン』

岳想居士

皆んなが間違わぬ林に

正しく進むために

石を積む。

不安定な石を積んで

後から積んだ人達の石まで

もろともに倒してしまふ林な

積み方をしたくわない。

緩る人達のためにも

積む人達のためにも

どつしりとした

大きな石を積もう。

無意識に積んではならない。

ケルンは道標だ

登山者の心を見した

美しいものだ。

(五)

モタモタスキー行

紺野たい子

「あらたいちゃん真黒な顔をして」と呆れる友「え、この頃スキーに熱を上げているのでね」といささか得意顔。出来ない友は羨がり「難しいでしょう、どの位を滑れる様になるの」と向ひかける。

そこでスキー程愉快で素晴らしいスポーツはほかに無いと能書沢山で宣伝これ務の貴女もおやりなさいと勧む。と書くと如何にも上手な技ですが私もスキー一年生でモタモタとゲレンデで一日雪に埋るスキーヤーです。

それなのに大それた横手越え、友の誘てにのつて上野駅を脱走と出かける。バスに揺れくって草津下車、素晴らしいお天気にスキーを肩に天狗山を左に渡向山に見送られ一同元気に愈々一日の行程のオナーが、雪は力チカチのアイス盤、てくくくと歩くと中熱くてくく汗は流れる、肩は痛くなるもの、一時間とたかない中に遂に悲鳴を上げ吉野さんの布厄介になる。でも段々と同

(六)

行者より遅れとても予定の時間には越えられそうも無く途中より引返す事となり皆さんには大変すまなく思ひながら中食をとり死鬼を取戻す。

さて愈々降りです。

颯が大変、ガツクを肩にスキーをつけ第一歩は斜滑行、スーと滑り出したと思ふとたんはすつてんころり立ち上り滑らうとする時、ガツクがころくくと氣になり重心が前に後にスキーの上で体が揺らく、後では「エツチを立て」と云う声、でもエツチを立てる気か何が何だか夢中です。

前の人影は大分遠く見え隠れする早くくと疑ばかりあせり足の方はてんでため、遂に締める。見ている人の熱い山の中すべつてはころびころんでは滑り見られた怪好ではありません。

余りころんだので構わないと思ふより可笑くて一人で笑いながら登った道を降る氣易さでどうにか怪我もせず下れた事を喜びとして同行の皆さんに御厄介になつた事を感謝しつゝ、湯治致しました。

でもツアードも又楽しんで二三時間行程で行かれる所

があれば又怒りずに出かけ度く、轉ぶ味も嬉しく自然の中にとけこんで子供のよう一日を過せる事を想うと明日にもザツクを肩にスキーを擔いでと、一人あれこれと楽しんで居ります。

今年もせろく／＼スキーもおしまいです。

自分の消つた機を振り返り見るとモタモタと眺く二本のシユアール、と又々に大きな穴がアツニツと、教え切れない程、でもその二本のシユアールと、教々の穴の一つ一つが楽しい想ひ出となる事でしょう。

山と酒

塚田耕一

僕の酒好きは会の人達にも大部知られて居る様だ。

僕も山を好きなのは人には買けない積りだが、一寸今の如一日二日続けて身体に暇が出来ない、何かしら身辺にゴタゴタした雑用が多過ぎるからだ。

それで僕は僕なりの考文方で、山と酒を結びつけた論理を型どりに整理に整られてある。これはもう相

当前からである

「こんな論理を造りたい」という僕の気持を真のアルビニスムを調える人が聞いたなら、憤満違る方ないだらうが、そういう方々にはこの一文は此処から以後を讀まない様にして貰って構わない。

僕の山へ行く最高の希望は奈辺にあるかと云うと、

唯「自己を「孤独」の中へ置く所に行く」

と云う事のみに見える。と云う流れが解つて来た。混濁した社会の波に漂う僕は、日常の生活に疲れ果てて魂はグライنداتトにかけられた金物の様に、ハイピッチで、すり減らされ、萎縮して行く。其等の社会から寸時でも逃れでて、僕の可愛い、魂は豊かな想ひの一時を与へたい爲に僕の身体の他の部分は勤勞奉仕をするのだ。

僕は煩はしくなると山へ行き度くなる。

「孤独」を求めて僕の魂が絶叫するからだ。白銀の山にも青葉薫る山にも、むんむんする草息れ

する夏の山にも、紅葉に彩られる静かな秋の山も、僕の孤独を求めると要求を心良く何時如何なる時でも受け入れて呉れるから僕は山に入りたいと願ふのだ。

然し僕の魂が疲ら、さよやかな希望を絶叫しても僕の身体がこれに耳を傾けて呉れない時が多い。斯くなく日は僕の魂は

「孤独！」

「孤独！」

と叫び続け乍ら一時の慰安を求めて涙ぐみ、グライNDERから遠去からうと、もがき悲しむ。憐れを催した僕の身体は、

「では酒でも飲んで我慢しろ」と云ふ事になる。

昔流行った

「酒は涙か、溜息か、心の憂さの捨て処」

と云ふ唄があるが、僕の魂は山に行けぬ、「憂さ」の捨て処、と酒に親しむ身になった。

酒を飲む内、酒の味は親しみを憶へたが、酒を何んの気持ち待たずして飲んだら、余り美味い飲物とは考へて居ない。けれど飲む程に、酔ふ程に、僕の魂は、社会を離れて僕の身体の中に落ちついて来る。グライ

NDER・ストップし、魂はすり減らされる恐怖から解放されて豊かな感ひの一時を魂に与へて呉れる。だから僕の魂は山と共に酒も歓迎する旅になつたのだ。酒を飲んだ僕の魂は、山を恋し続け、亦忘れる。それは「山に行けぬ」と云ふ「憂さ」を捨て、しまひたいからだ。

酒を飲むと僕は朗らかになる。

魂がノビノビと羽をのばすからだ。

それはとりもなをさず僕の魂が山に入つた時と同様な状態、即ち「孤独」な状態になつた事を意味する。然し「孤独」な魂は、孤独を飽食すると、「孤独」の味を忘れてしまふ。「御馳走」を食べつけた人が、それを「御馳走」と思はなくなるのと同じ事である。その結果僕は孤独に親しまうとする魂は、余り「孤独」と云ふ御馳走を食べさせてはいけない事になる。

山や酒も適度にしなければいけない事になる。今は幸か不幸か両方共不足勝ちな状態にあるが、今後僕の魂が「孤独」を望んで望み通りに出来る旅になつた時も、「孤独」を余り食べ過ぎない旅に気を付けてや

らなければいけない。

山も酒も趣味の内に載つて置く事だ。

これが所詮、社会にも、僕の魂にも、

「身を持つる」

と云ふ事になるのだ。

以上

四月七日夜之記

八方尾根

南 博人

一月〇日

登標れた八方、第三ケルンへと、シユプールは伸びる。途中馬留小舎にて一息してより一喘して尾根に出た所が黒菱小屋である。下より約二時間半の喘登であつたがたいした事もない。小屋の附近まで来た時は、ガスが掛り風さへ出てくる。小屋より雄大な大斜面を思切り大きなチグザグを切つて、見る／＼高度を上げる。登り切ると、少し高い所に出る。此処が黒菱平である。此

の附近を云う迄も無くガスの爲は何物も見えず、ただ正面に広大なスロープが展開する。ラツセルはスキト靴を埋る程度であり再び大きなジグザグが雄大な雪面は刻れる。徐々皆バテ始めるのも此の登りだ。上記の方はクラストレーラツセルの必要も無い此の上より少し尾根らしく、此の斜面を登り切ると第一ケルン迄は簡単に行けた。

登り来る人々の大部分は此の第一ケルンで引返へす。我々のパーティーも此処で二手に分れ、一方は黒菱へ方は第三ケルンへとヤツホーの声も遠ざかる。ラツセルを交替しながらや、潜ぐり気味の尾根の左側を登る。此所は風のため雪は少なく、岩稜恒松等が所々に姿を見せて居る。場所によるとアイス盤は蒼く光つた所もあり歩行は快調であるが右が切れているのであまり油断は出来ない。八方山の三角点らしき物を越すと広い平地に出るガスの為眺望は零だ一寸方向が分かり難い矢であつた此処はラツセルが深く膝のあたりまである。前方に唯一点黒い物が見え始めた。第二ケルンである。もしこのケルンが無いとしたら八方

もサブ一つでは行く氣に成まい。

一息入れて第三ケルンへと急ぐ。もう此の附近より上はスキーと云うよりは登高と云った方がピンとくる様な地形であり尾根は益々瘦く、岩稜が多くなり濃霧と強風について此の稜線を行くとピツケルやアイゼンでも用い度くなる間もなく第三ケルンに我々は到着した。敬告。遂に我々は三ケルンへと到着したのだ雲稜の痕は段に強くなびいて纏つた。

指導線には左至る唐松へ。右才ニ・一ケルンを経て黒菱小屋に至ると記してあつた。

誰かが去つたふしむし氣に入つた。至る唐松へ、かし此所より下降は目測約半軒もあるうか。岳樺の樹氷に飾られた林を我々のシユプールも消えた。濃霧と強風が風雪と交り時向も余り無かつたので此々に蜜柑を一ケ袋持だけ残して才三ケルンより黒菱へ細野へ或る時は雄大なスローアを大きなボーゲンで、或時は切開かれた林間のスローアを又目の廻る様なポップスキ―にて快速に雪面をなめる様に雪道を上げ乍ら……。

八ツ岳合宿

吉野幸作

吉野、大菅、南外一名

三月十七日

新宿駅発最終、発車迄後数分未だ来ぬ南を案じ乍ら発車した列車のステップに飛乗る。立川駅で乗つて呉れる事を心に願つて

三月十八日

茅野駅(大、〇七)発(大、三〇) 穴山(七、〇〇) 柳沢(七、三〇)発(八、三〇) 裏園(二、〇、〇五)ニ候(二、三、五〇)発(二、四、三〇) 行者小屋(二、九、二五) 昨夜の雨もカラリと晴れ渡り列車は南ア八つの山々を左右に見て暮進する

六時七分茅野駅着。直ちに駅前より穴山行バス乗車。柳沢部活七、二〇到着する。一農家に入り、主食調達、縁側を借り朝食をとる。

各人のキスリングには調達した主食及其他が加量さ

れ、いやになる程重い。これで今日の行程である行者小屋まで続くかな。と自分で自分をうたがいたくなつた。

泥んこになつた重い靴を引摺下ら一汗かいてハッ岳裏園に着く。芝生にキスリングを救出せば体は空中に浮出す程、雑煙を吐下ら見る南北アの白銀の山々が素晴らしい。二候着二時、積雪六、七十程位、一息入れで最後のアルバイトに備える。二候より四、五百米も歩かぬ内遂にもぐり出し歩行困難の嵩ワカンを巻け、ピスケツトで腹造へをする。時間も大介経過し早く着かねばと気ばかりあせつても足が云う事をきかない。

三月十九日、曇

長道、赤岳、中岳、阿彌陀岳

小屋(二、三)―石室(二、三、五)―赤岳(二、四、三〇)―赤岳(二、四、三〇)

―阿彌陀岳(二、五、三〇)―阿彌陀(二、五、四〇)―登(二、六、三〇)―行者小屋(二、七、〇〇)

雪に埋れた小屋の夜明は遅い。入口よりかすかに差込む光線に時計を見ればもう九時を過ぎて居る。幾何起きたのか大首が飯の用意をして居る。それを知らずにも中々起きられない。横には南と中川が良く眠つて居る。十一時半出発。天候は曇痛い腰もアイゼン装着すればシヤンとする。小屋の裏手より長道通りピツチを上げれば、右手の赤岳西壁は我々を威圧する如く聳えて居る。

何等が傾斜の緩くなつた岩稜帯をリツチ通り登ればあつけなく稜線に飛出す。石室は屋根まで雪が吹込使用不能。赤岳よりキレットの方に一段下り中岳目掛けで馳降りる。立場谷の雪庇に注意しつつ、雪稜を行けば阿彌陀のゴルに着く、見上げる阿彌陀の頂までは中々急峻に見えるが、中程より傾斜も落ち、四十分程にて山頂に立つ、頂は平坦で気分が良い。眼前には南稜が鉛い雪稜となつて伸びて居る。

二十分程四方の展望を希望し下降開始、中程より小

屋を指して尻セードに剛快な雪煙を上げた。

夜は更持よくうなる。ラヂウスの音に耳を傾け乍ら大管得意のカレーライスに舌鼓をうつ

三月二十日 曇

行者小屋沢

小屋(八、二〇)―行者小屋沢ニ候(九、一〇)―滝下(九、四〇)―石室(二二、〇〇)―小屋(二二、三〇)―小屋(二二、三〇)

今朝も又大管に飯の支度をして貰う、八時二〇分ザ

イル及登攀用具を撃え小屋を後にする、昨日登つた夏道左に見て行者小屋沢に入れば行く程に傾斜も急となりステップを切る態で前途は滝によつて阻止される早速アンザイレントオーダー 吉野 中川 大管 南の順

一服喫つて行動開始 滝の手前を急峻なルンゼに入る 雪を蹴りつけて攀方れは高度はぐんぐん上り、気分快 的上部は益々狭く急峻を加える ルンゼを抜ければ上部はナイクリワヂ、リワヂ上に立ちピツケルピレイにて平ツヘルする 小憩の後リツチ通し登攀を続ける 行手は岩稜の為又も左の沢にトラバース 二、は先程の滝の上部らしく高度感は満点、然て傾斜も落ち強凡

次く赤岳石室直下に露出した。

時向がまだ早いので、大管、南、中川の三人は黄岳 破黄岳に遊びに行く、一人にて夏道を馳下り小屋にて 少憩 大同心、小同心の偵察に行く中山乗越附近よりの 大同心、小同心の岩峰が印象的

六時全員帰着、今夜は楽しい合宿の最後の夜 暖い ミルクに干手噴りやら山の天狗話は寝時までも盡ない 三月三十一日 晴

小屋(八、二〇)ニ候(九、一〇) 柗沢(二二、〇) 茅野沢(二二、三〇) 相変らず朝起は大管、六時半全員起床、今日は帰京の日だ。荷物の整理、飯の準備と帰る日は何かと忙し

い、 八時二〇分小屋の整理を済して外に出る。四日間偷く通した小屋に別れを告げ出発、静かに見送つて呉れる 赤岳、横岳、阿彌陀岳を背後にして粉雪を蹴散してピツチを上げた。

次に訪れる日を胸に浮べたら。

春淡き山楯の夜月明り

友と語らむ山の慰出

類別	品名	数量	単位
装具	ピッケル	各	自
	ワカン及アイゼン	"	
	スキー	"	
	シール	"	
	尻当	"	
	ギスリング	"	
	時計	"	
	マウチ	"	
	シヨラフ又ハ毛布	"	
	ザイル (40)	/	
	スコップ	2	
	テグサス	/	
	小型バーナー	/	
	コッヘル	2	
	カラビナ	7	
	ハーケン (若用)	10	
	(氷用)	3	
	バイル	/	
ハンマー	3		
携夫	2		
ガソリン	2 (升)		
メター	10		
ローソク	10		

類別	品名	数量	単位
主食	米	6	升
	パン	4	斤
	ビスケット	12	袋
	うどん粉	5	升
副食	豚肉	150	匁
	干菜	40	匁
調味料	味噌	200	匁
	醤油	5	合
	バター	半ポンド	
	カレー粉	1	袋
乾物	干貝	10	枚
佃煮	貝柱	150	匁
	シヨウガ	30	匁
嗜好品	アメ	1	袋
	南京豆	1	袋
缶詰	ミルク	2	缶
	ジャム	2	缶

山と人

大島 宏

歩き別れた新道を今日も一人でとほ／＼と、一ノ倉へと歩んでいた昭和二十五年七月の或日の事だつた。威臣的だ一ノ倉の諸岩遊ゆルンセは私産の訪れを待つかの様に重涙に微笑んで居る。終戦後始めての一ノ倉。

今此の沢を離れてもう六年。何人と永き歲月が過ぎ去っていた事だろう。私が最後に一ノ倉を訪れたのは昭和十九年の秋だつた。

戦争は苛烈を極め激しい現実には吾々吾人の、憧憬さへも奪ひ去らうとしていた。

此の懐しい沢や嶺とも永遠の別れを靴めて岳友Nと二ノ沢木谷を共に登り戦火の中に去って行つた、其時の私の心には別離の痛切々たるものがあつたのだ。

平和終り再び一ノ倉島帽子ステスは立つた時、万感

(一四)

胸に迫り云うべき言葉はなかつた。理想も無い六年の空白。其れは決して短い月日ではなかつたからだ。

吾々の周囲も総てが変つた。その食料生活その衣料生活大きくは社会の改革国家そのものの大改革がなされてゐつたのだ。その一つ一つに私産の無想だにし得へなかつた事柄が次々と行なはれていく。

其の様は精野下のもとに於ては岳友も自然に衰つて行つたのは当然である昔の岳友にて相愛す山に精進して居る者は教人を教へる程である。他の者は山を離れて行つた又忘られぬ岳友の遺書もあつた。Hが新雪の標高に逝きSが幽ノ沢左滝に逝きKとSが此の一ノ倉沢方三ルンセに散つて行つたのだ。

彼等は私産以上に山を愛し自然を慕つた。新雪光る山の嶺グリーン色に輝く高原に花咲き乱れるゴバルトの大空のもとに君等と共に唄ひしアルペンヨーデル、詩を語り文学を語り哲学を論じ合つた懐しい岳友はいないのだ。

一ノ倉沢出合で偶然一緒になつた昭和二十五年の丁巳

会の塚田とサツテルを越えてブルンゼヘンと久し振りの
愉しい登攀だった。

中央奥壁三ルンゼ六ルンゼ鳥帽子と、岳友と共に歸
ひし旧き想出が走馬燈の様に馳巡る。

然しもう私は岩陽や嚴冬期の山々は後何年となくし
て去る事だろうそれは必然的に考えられる事である最
早危険を冒して近思場をアタックする気持には到底
なれぬ既に廿歳前後頃のフアイトが失はれつゝある
事を感じる。

学生時代の経済的又時間的にも慮れていた当時と異
り此の厳しい現実には、たつた一人で生き抜いて行かぬ
はならぬ現在の境遇ではそれは当然の事である。

往年の岳友、U、N、M、諸氏も、現在次才に悪場
は去つている、Mの話ではH会M氏、O氏も連のいて
居るとの事、M氏がK会に於て才一線に動いている位
のものである。

私は何故とも無く寂しさを感じた。然し私はそれで
良いのだ年令的に見て何時迄も廿才前後の気持を持続
出来る事は無いからだ。

列へ平凡の山々でも必ずそこには吾々の心を満して
くれるものが在るに相違ない私は今更山の論義を言及
はぬいのだ飽くまで登山は個人の自由である。高き山
でも底き山でも私の心が満され、ほそれを充分である。
「登山家とは、彼が過去に於て進路的に獲得せる登
山技術上の知識を目的の山頂に達せんが爲にあらゆる
知識と能力とを傾ける事に心から此の岳を感ずる人
を云うのである」と或人は云つた。

何はともあれ私産は此の混沌した世の中にさ、やの
なグループ東京雲稜会を創立した。

会員も少く技術的にも未だ未熟の跡は免れないが創
立してより数ヶ月であるし、吉野や塚田や川又産が養
成に努力して居る事ゆえ其中に纏つて行く事だろう。
「積極的行爲にのみ眞理は証しする」と古人は云つ
た。私はそれを期待し心から岳を待つて見守ってい
る。

（山日記より）



行こうと理想の道に、君達を
ザイルカメラ——とし
て共に出發しよう。
前方には峻削の山が
あり千尋の谷が狂る。
其峰を突破して斗い
進むの長途大程の事
は面白い。
見給へ、双色のヴェール
の鞍方にはゴバルトの
空が在り、僕等の前途に
は希望が待つて居る。
(U)

一月一日 七日 船野合宿 係吉野、同行者七名
二月十一日 富士山 係塚田、同行一名
二月十六日 三十日 白馬岳 係大島、外一名
三月四日 横手越へ 係川又、同行七名
三月十七日 二十日 八岳合宿 係吉野、同行三名
四月七日 丹沢塔岳集中 係委員
五月五日 六日 万太郎山 係吉野、東田
六月三日 ザイル寮(再入) 係委員

個人山行

(二六)

一月十四日十五日 中里スキー 川又、原田、倉田
紺野、辻谷、遠藤、新井、吉野、外二名
一月二十八日 湯沢スキー 原田、川又、紺野、倉田、大菅、塚田、吉野
二月四日 湯沢スキー 吉野、川又、原田
二月十八日 土樽スキー 原田
二月十八日 鳴子スキー 川又
二月二十五日 中里スキー 川又、原田、紺野、遠藤
四月二十二日 芝倉スキー 吉野、川又
四月二十九日 三ヶ峠 塚田
五月六日 三ヶ峠 大島
五月五日六日 初七の沢 萩渡
五月二十日 壑炭岩 塚田、原田、川又、遠藤、吉野
五月三日 霧ヶ峰高取 遠藤、外一名
五月十三日 丹沢セバ沢 遠藤、外一名
五月二十日 丹沢ミヌエ沢 三浦、外四名
五月二十七日 丹沢ミヌエ七沢 萩渡、外一名
六月三日 小田原イクリンダ 大菅

会務報告

一月 癸足集會（於柳森神社）

吉野、塚田、川又、大島、南、渋谷等

第二回 一水会

二月十日 於柳森神社

出席者 大島、三浦、川又、吉野、新井、原田、紺野

倉田、渋谷、南、塚田、八戸

1. 山行報告 2. 山行計画発表

3. 会務報告 4. 会務報告

第三回 一水会

三月七日 於神田万世齋柳葉神社

出席者 原田、倉田、紺野、大島、吉野、川又、大島

本郷、織子、氏、中川、一、実、氏

1. 山行報告 2. 山行計画発表

3. 丹沢集中入、岳台宿の件 4. 会務報告

第四回 一水会

於柳森神社

出席者 吉野、川又、遠藤、新井、倉田、大島、大菅、渋谷、南、塚田

羽賀正太郎氏、中川一実氏、小林氏

1. 山行報告 2. 山行計画発表 3. 丹沢集中の件

4. 会期作成の件 5. 会務報告

第五回 大回 一水会

五月二日、六月六日 於柳森神社

出席者 三浦、新井、南、渋谷、遠藤、辰、大菅、吉野

大島、川又、紺野、塚田、原田、倉田

寄附御礼

金貳百円也

会旗

本郷 織子殿

川又 考之殿

新入会員紹介

猿渡 隆一君（紹介者吉野）

住所 関東通信有内

鎌倉 鎌倉新井 八幡ヶ谷 大島

住所 港町 鎌倉 新井 八幡ヶ谷 大島

雨山峠

岳 想 居 士

私はそう云う所に坐つてゐた。

其所は人里遠く離れた小さな峠だった。

稚木と萱に包まれた山男でなければ知らない峠だった。

私には印象の深い所だが私は何時も夜訪づれてゐた。

此の峠を越えて私が目指して行く所は

祇崗岩に磨れた美しい谷だった。

昔は獵師達がエモノを追つて通つた所だったが今は此

の山や谷を愛する人達の通ふ峠だ。

私は此所を岳友と歌を唄い乍ら騒いで登つた事もある。

たった独りでほの赤いランタンを頼りに寝巻を求めて

登つた事もある。

今日は空は晴れてゐた。

近くには同角山景が眺られ残りの雲をきらめかせて

遠くには富士山口の美しい姿も眺められた。

(一八)

両側の林の中からは川鳥達の囀き

眼下には玄倉川の真白い岩床が清水を豊富にた、へて

涼々と流れてゐた。

私の空虚な心は此れらの雰囲気になつてゐると程よい

疲れは一度に消滅してしまう。

最は初夏の風に揺れてゐる。

大きくロヤツホトと叫ぶとあたりの山々に焔して森

田とした墾地はかすかにざわめいた様に感じた。

藍色の空に鶯が一羽円舞してゐる。

私は考えた。

此人は小さな山にこんなほまで素晴しい峠があるのだ

からあの大きなアルカスにはもつと／＼これ以上に

すばらしい峠があるだろうと……

しかし此の峠程私の心を慰めてくれる愛着に満ちた所

はなかつた。

否、あつたかもしれない

だが其の峠は私の雰囲気にはマツチしてゐなかつた。

白サレが自然にサラ／＼と暫時くすれ落ちてゐつた。

まるでサラメ砂糖の袋をあけた様に

そんな峠に私はいつまでも坐つてゐた。
漠然とした風景だったが

『頂上』 太陽の誕生 三浦一郎

何にかこれらの山に又谷に私は惹かれてゐた通り馴れた
此の峠はいつも多らなかつた

登山者が幾百人この峠を越えた事だろ

その人達は此の峠に立つた時

どんな気持ちだつたらうか

味気のない峠だが私には想出は深い

夏に秋に又春に雪にうもれた冬に

私は幾回ともなく通つた

こんな雰囲気に浸つてゐる時私は何にもかも忘れてし

まふ

唯山を登えた私を私が喜悅するのだつた

どんな事を感じたか下ら私は心に残るものを感じた

人の来ない内に私は静かに此の峠を下つてゐた

其の後の峠には萱草が初夏の微風にゆられてゐた

体は腹の芯まで冷えてしまひ指先を動かすのもおつ
くうにはなつてきた。時計を出して見ると五時少し廻つ
てゐる。そろ／＼深黒の世界から甦れるのも近い……

暗黒のもやが幾分淡墨色になると、山が雲かわから
ぬらから形あるものが育膜に映じてくると、張り詰め
た心の中に何らかの安らぎが芽ばいてくる。もうこう
なれば視力の活動は一瞬の休みもない。スカイライン
が見え、空が暗青色から藍色に変わりバテ色に変わる頃
になればもう神々の乱舞の舞台である。雲海は紫紺の
峯々を越えて躍動し、雲は空の色を写して時々刻々と
変化して行く。

その躍動がフライマックスに達した頃雲海の彼方、
茜さす空との接線に真紅の線が閃くとその川さな劇
れ目から飛び出す金色の針は空と雲を突き破り、忽ち
まち半月形になり隘門になつて雲海から飛び出し再び
金色の円となつて未熟する太陽が誕生するのである。

編輯部

て参加を期待したい。

成方針並法人に対する痛切な批判の

⊗会報が此の様に遅れたのは原因が 一考案を述べた又冬富士や八ヶ岳は 栗津らはいからで何処の山岳会に於 吉野や川又や南達が最末期の三千米

⊗東京雪稜会は雪稜創刊号を発行し ました。此の混迷した社会状態のものだが唯山 の山々に対する限り無き精進を物語る

とに吾々の会報を発行出来得たのは に行くだけであつたらう何れも会に入る 記録である。よく検討を加えて載

ともかく内容貧困ではあるが本当に う一つの形態を組織する以上会に於 集会は規定六時開始とあるのに固

嬉しい事だこれも仲間の会に対する ける義務も当然知らねばならぬ会 なく護つて来るのは三三名に過ぎない

情熱の支援があつたからである。吾 報は一つの文化的機関で在る此れに 如何なる事であろうか敢しい自己批

吾の後から入つて来た新人も日毎に 依つて会員の知性も高められ眞の岳 判を闘うとして今後より時間には必ず

グループの一つの支柱となつて雪稜 人としての要素も磨かれるのだ。 敢守して載さ度い。

会の基本的正統派登山の正しい認識 山に行けば必ず報告しなければなら ないこの簡単な事は出来得ないのは 全会員の総てのものに対して希望や

を継承しつゝ努力しある事は、頭母 ないこの簡単な事は出来得ないのは 徹底した批判を載せる事にしてしました

しい。是非其他方本願にならぬ様 情願い会員の依り一層の奮起を望む。 微塵した事を素直に申し述べて載さ度

今後への発展的段階により強く協力 情願い会員の依り一層の奮起を望む。 感じた事を素直に申し述べて載さ度

と取斗を願うものである 然りも終つた「会報」も出来た「バック」も い此の各家に依つて全会員の向上を

⊗会員の集会に対する積局的参加は 出来た後は唯会員の積極的行動にの 計り度いと想います。

よく飽き山への情熱を反映して居 雪稜会の発展はあり得るのだ 文責は絶対に編輯者が負います。

るが未だしの感が在るから全員等つ 雪稜言の一文は塚田が雪稜会の育

昭和二十六年七月一日発行

雲稜 第一号

編集人 大島 宏

発行人 吉野 幸作

発行所 東京都小石川原町三三〇

東京雲稜会